別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　松永 俊男

本論文は、近代進化論史上、画期的な著書とされるダーウィンの『種の起源』（初版, 1859年）が、いかなる自然神学的背景のもとで形成され、さらに受容されたのかを詳細に論じ、日本の生物学史の学界で高く評価ている『ダーウィンの時代――科学と宗教』（名古屋大学出版会, 1996年）を大幅に改訂して成ったものである。

まず、松永氏は、19世紀初頭の英国のキリスト教が英国国教会内の保守的な高教会派、リベラルな広教会派、聖書の教義を重視する低教会派に分かれていたことに注意した上で、ダーウィンが広教会派の影響で科学研究に踏み出したことを確認する。松永氏によれば、有名なビーグル号の航海による調査もそういった宗教的背景をもとにしていた。ダーウィンが航海から持ち帰った化石標本と鳥類標本を分析し比較研究する動機は、リチャード・オーエンによって与えられた。その最初の結果は1844年にまとめられるが、それによると、環境が変化した場合、神の直接の手による自然選択によって生物は新たな環境に適応したものになる。『種の起源』にもその痕跡は残り続けた。ダーウィンは、1861年末になってやっと自然選択が神とは無関係な自然現象となるという認識を得た。しかし、『種の起源』自体は、最後の版にいたるまで、自然神学書としての趣を残したままであった。また、1882年にウェストミンスターで行われた葬儀は、英国国教会の権威がダーウィンの進化論学説を認めたことを公に示すセレモニーとして理解することができる。ダーウィンが無神論者であったことが外部に知られるようになったのは、日記などの公刊を待ってのことに過ぎない。

他方、19世紀後半の英国社会総体の世俗化とともに、科学者の中に宗教と科学の闘争という、その当時の社会総体の世俗化の観念を過去に投影するような歴史観が形成され始まった。1874年に行われたジョン・ティンダルの英国科学振興協会での会長講演は、その一例である。さらに、ダーウィン進化論の普及に不可避の役割を果たしたトーマス・ヘンリー・ハクスリーの啓蒙的進化論も科学の世俗化を促進した。このような詳細な進化学説の跡づけによって、科学と宗教の闘争史観と言われるべき考えが、ダーウィン自身の進化論とは独立に、科学的言説それ自身とは一応独立に形成されたことが分かる。

進化論そのものの発展については主論文ではそれほど詳細に論じられていないが、参考論文の『近代進化論の成り立ち――ダーウィンから現代まで』（創元社、1988年）で簡明にまとめられて紹介されている。

松永氏は、現在、日本でのダーウィン進化論成立史研究の第一人者と見なされているが、本論文で、ダーウィンの書いた著作を詳細に調査するだけではなく、周辺部の広範な自然神学的論争をも研究し、ダーウィン進化論の形成過程と受容過程を緻密に再構成しえた学術的意義はまとこに大きい。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。